

町医者だより

平成27年02月号

鼻炎あれこれ

＜発行・お問合せ先＞

おおわだ内科呼吸器科

院長 大和田 明彦

市川市南八幡4-7-13

ヤソビル本八幡2階

JR本八幡駅南口(シャポー改札口)

2分ミスタードーナツ並び

ヘアサロンAsh向かいビル2階

電話047-379-6661

おおわだ
内科
呼吸器科

花粉症の季節が始まりました。今年は花粉の飛散量が東日本では多いようです。花粉症は正確には季節性アレルギー性鼻炎というべきです。今年はじめに米国の耳鼻科関連学会からアレルギー性鼻炎の治療ガイドラインが発表され、ニューイングランド医学雑誌の今年の1月29日号にもアレルギー性鼻炎が取り上げられていました。改めて鼻炎について調べてみました。

非アレルギー性鼻炎の存在

アレルギー性鼻炎は免疫グロブリンのIgEを介して起こる鼻粘膜の炎症で、全身性のアレルギー反応(いわゆるアトピー素因)が陽性です。すなわち、鼻症状があって皮膚プリックテストや血清特異的IgE抗体検査(アレルギー採血)のいずれかあるいは両方が陽性になればアレルギー性鼻炎と診断します。実は喘息の患者さんの80%以上の方に鼻炎症状があって、アレルギー性鼻炎を持っている患者さんの40%が喘息を持っているか将来喘息を発症するとするデータがあり、喘息と鼻炎は深い関係にあります。一方で皮膚プリックテストや血清特異的IgE抗体が陰性の鼻炎が存在します、これを非アレルギー性鼻炎と呼んでいます。この頻度はアレルギー性鼻炎の3分の1程度とするものから鼻炎全体の約半分に上ると推定する論文(Allergy Asthma Proc 2001)もあって無視できません。

非アレルギー性鼻炎の典型例は血管運動性鼻炎といわれていました

温度差や湿度差や気圧差などの気候変動で鼻水が出たり、鼻が詰まることを経験された方がいらっしゃると思います。これが典型的な血管運動性鼻炎の症状で、一般的には鼻のかゆみやくしゃみ、目のかゆみは少ないといわれています。実はその病態は良く分かっていないのですが、非アレルギー性といいつつ不思議なことに点鼻ステロイドや抗ヒスタミン点鼻薬といったアレルギー性鼻炎の治療薬が効くことになっています。

近年は非アレルギー性鼻炎の約50%は「局所性アレルギー性鼻炎」といわれています

「局所性アレルギー性鼻炎」は、皮膚プリックテストやアレルギー採血は陰性で全身性のアトピー素因はないが、鼻粘膜に限定して特異的IgE抗体が産生され鼻炎を引き起こすというもので、確定診断には鼻汁中の特異的IgE抗体の存在を証明する必要があります(J Allergy Clin Immunol 2012)。

先に述べた血管運動性鼻炎に点鼻ステロイドや抗ヒスタミン点鼻薬が有効だったのは、血管運動性鼻炎が実は鼻粘膜の限局性アレルギー症状だった可能性を示唆します。

喘息との比較

喘息に関して言えばここ7-8年の原因遺伝子検索の結果、IgE(いわゆるアレルギー)に関連する遺伝子が見つからず、喘息の発症へのアレルギーの直接関与は否定されています。ですから喘息の分類としてアレルギー性喘息とか非アレルギー性喘息という言い方に抵抗を覚えます。鼻炎に関して原因遺伝子検索がなされれば、「アレルギー性鼻炎」とか「非アレルギー性鼻炎」といった分類は意味をなさなくなる可能性があります。